

女性宣教師ベル・マーシュ —その書簡にみる米国長老教会 女性海外伝道協会の特徴—

齋藤 元子

はじめに

本稿は、2015年3月に刊行した明治学院歴史資料館資料集第10集①『バラ学校を支えた二人の女性 —ミセス・バラとミス・マーシュの書簡—』において筆者が訳出した女性宣教師ベル・マーシュ (Belle March) の書簡を取り上げる。書簡から読み取れるマーシュの横浜居留地での生活や交友関係を明らかにするとともに、彼女を日本に送り出した米国長老教会女性海外伝道協会 (The Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church) の特徴を、他教派の女性海外伝道協会との比較などを通して、示したい。

1. ベル・マーシュとその書簡

ベル・マーシュは、1876 (明治9) 年10月米国長老教会女性海外伝道協会派遣の女性宣教師として横浜に着任した。居留地39番においてJ.C.バラ夫妻 (John Craig & Lydia Ballagh) とともに生活し、バラ学校と住吉町小学校で教鞭をとり、伝道活動にも従事した。バラ学校は、ヘボン塾を受け継ぎ1876 (明治9) 年1月よりJ.C.バラが運営した学校であり、住吉町小学校は、ヘボン夫人 (Clara Mary Hepburn) が1874 (明治7) 年に開始した学校で、バラ夫人がそれを引き継いだ。

1879 (明治12) 年、マーシュはバプテスト教会の在日宣教師ポート (Thomas Pratt Poate) と結婚し、バプテスト教会に転籍する。その後、宣教師夫人として、仙台、盛岡など東北地方の開拓伝道に力を尽くし、1892 (明治25) 年に帰国した。

資料集に訳出した書簡は、マーシュが来日間もない時期に居留地39番からアメリカの家族、親類に宛てたものである。資料集ではバラ夫人の書簡も併せて訳出したが、バラ夫人の書簡が米国長老教会女性海外伝道協会の機関誌に掲載されること

を念頭において書かれたものであったのに対して、マーシュの書簡は完全に私的であり、女性宣教師としての使命感と同時に、戸惑いや不安、バラ夫妻に対する感情などが素直に吐露されている。

2. ベル・マーシュの横浜生活

マーシュが女性宣教師として横浜で活動した1876 (明治9) 年10月から1879 (明治12) 年10月の3年間、同僚と呼べる同じ米国長老教会女性海外伝道協会に属する独身女性宣教師は横浜にはいなかった。同居するバラ夫人をはじめ、周囲の女性は宣教師夫人であった。マーシュは、同じ長老教会の宣教師夫人よりも、むしろ他教派の宣教師夫人や女性宣教師との交流に安らぎを得ていたことが書簡から読み取れる。

ミセス・グリーンは、私にとって、ミセス・バラの10倍もの助けをしてくれる人物である。(1876年12月)

男子学校はバラ夫妻が世話をしているが、すべてのクリスマス・ソングを私が教えなければならぬ。ミセス・バラの指導は遅れがちで、ついには少年たちのやる気を損ねてしまった。よって、私が引き継がざるを得なかった。(1878年11月)

ミセス・バラが中国へ行っている間、私は友人のミス・サンズのところに滞在している。この生活はミセス・バラが戻るまでのものであり、三週間以上は続かないことを思うと恐怖感さえ抱いてしまう。ミス・サンズのような女性がこの伝道地にもう一人いるとはとても思えない。(1878年5月)

書簡に登場するミセス・グリーンはアメリカン・ボードの宣教師グリーン (Daniel Crosby Green) の夫人であり、ミス・サンズは米国バプテスト教会女性海外伝道協会より派遣された独身女性宣教師クララ・サンズ (Clara Sands) である。

サンズは、マーシュが最も心を開き信頼を寄せた友人であった。1879 (明治12) 年7月、サンズが実施したバプテスト教会の農村伝道にマーシュも同行している。マーシュがバプテスト教会の宣

教師ポートと出会い、結婚へと至ったのには、サンズとの友情が関係していたことは十分に推察できる。

3. 米国長老教会女性海外伝道協会の特徴

筆者は以前より米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会 (The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church) の研究にも携わっている。今回マーシュの書簡の訳出を通して強く印象づけられたのは、彼女を日本に送り出した米国長老教会女性海外伝道協会が、同じプロテスタント教会の女性組織でありながら、米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会とは、組織の運営面などにおいて、かなり異なっているという点である。

ミセス・パーキンズに手紙を書き、仕事量が多すぎると訴えたが、彼女の返信は、「ミセス・ヘボンに加えて、ミセス・ノックスとミセス・ウィンという有能な助けがいるではないか」というものであった。(1879年1月)

上掲のマーシュが親類に宛てた書簡の一文は、米国長老教会女性海外伝道協会の特徴の一端を示している。マーシュはフィラデルフィアにある米国長老教会女性海外伝道協会の海外通信担当者ミセス・パーキンズに手紙を書き、仕事量の多さを訴えたが、それは更なる女性宣教師の派遣を求める手紙であったとも言え換えられよう。しかしながら、米国本部からの返事は、宣教師夫人の力を借りろというものであった。ミセス・ノックスとミセス・ウィンは横浜在住の米国長老教会宣教師ノックス (George William Knox) とウィン (Thomas Clay Winn) の夫人である。

宣教師夫人に協力を求めよとの指示が米国の本部から出されることは、米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会においては、ほとんどありえない。米国メソジスト監督派教会では、女性宣教師を異教地に派遣する女性海外伝道協会と男性宣教師を派遣する海外伝道協会は別組織であり、個々に独立性が高く、女性宣教師と宣教師夫人は立場を異にしていた。よって、マーシュのような訴えがあった場合、米国の本部は支援の女性宣教師を新たに派遣するか、もしくは横浜以外の場所で活動する日本在住の女性宣教師を横浜に配置転換したに違いない。

これに対して、マーシュが属する米国長老教会女性海外伝道協会は、男性宣教師を派遣する海外

伝道協会との関係が緊密であった。女性海外伝道協会の公式記録にも、日本在住の女性宣教師としてヘボン夫人をはじめとする宣教師夫人の名前が記載されている。よって、宣教師夫人に協力を求めよという指示も不自然ではない。だが、マーシュは以下のように記している。

本部は宣教師夫人の助けを当てにしている。ところが実情は、宣教師夫人の誰かが体調を崩すと、独身女性宣教師たちはすべてを後回しにして、宣教師夫人の不足を補うことを期待されてしまうのである。(1879年1月)

マーシュの書簡からは独身女性宣教師としての孤立感が読み取れる。そして、マーシュが同じ長老教会の宣教師夫人よりも他教派の女性宣教師サンズに信頼を置くようになった背景も同時にうかがい知ることができる。

歴史に「もし」は禁物ではあるが、米国長老教会女性海外伝道協会が、マーシュを助けるため、早期に追加の女性宣教師を横浜に派遣していたならば、マーシュはより長く米国長老教会所属の女性宣教師として活躍していたのではないだろうか。



「旧築地外国人居留地散策」 —キリスト教を中心に—

中島 耕二

1. 安政の5ヶ国条約と全国外国人居留地の設定

幕府はペリーの砲艦外交に負けて1854年3月31日(嘉永7年3月3日)、日米和親条約(神奈川条約)を締結し、下田と箱館の2港の開港と18ヶ月経過後の下田での外交官駐在を認めた。この駐在に関しては、日本側理解は「両国の合意のもと」であったが、アメリカ側は「両国の何れかが認めれば」とするもので、英文から漢訳する際に誤訳が生じた。因みにオランダ語訳は英語の意味を伝えていた。この規定に基づき1856年8月21日(安政3年7月21日)、突然(日本側にとって)タウンゼンド・ハリスが初代総領事として下田に着任した。彼は来日直後から幕府に通商条約の締結を提議し、その後緩急の外交戦術を駆使して欧州列強に先駆けて、1858年7月29日(安政5年6月19日)、日米修好通商条約の締結に成功した。幕府はアメリカに続いて同様の修好通商条約を英、仏、露および蘭との間に結び(安政の五ヶ国条約と呼ぶ)、

箱館、神奈川、長崎、新潟、兵庫の開港および江戸と大坂の開市を約束した。

2. 日米修好通商条約第8条とタウンゼンド・ハリス

第8条 日本ニ在ル亜米利加人自ラ其国ノ宗教ヲ念ジ礼拝堂ヲ居留場ノ内ニ置モ障リナシ並ニ其建物ヲ破壊シ亜米利加人宗法ヲ自ラ念ズルヲ妨ル事ナシ亜米利加人日本人ノ堂宮ヲ毀損スル事ナク又決シテ日本神仏像ヲ毀ル事アルベカラズ双方ノ人民ニ宗旨ニ付テノ争論アルベカラズ日本長崎役所ニ於テ踏絵ノ仕来ハ既廢セリ

ハリスは元来貿易商人であったが、教育事業に熱心でかつ敬虔な聖公会信徒として日々の信仰生活を守っていた。彼は条約締結後、上海の米国聖公会ミッションに、日本へ宣教師派遣を勧める書簡を送り、以下の提言を行った。

日本人は礼節を重んじ、清潔で英明な国民であるから、宣教師を送るに当たっては、信仰心が篤いだけでなく、博識の人格者で、かつ教育・医療の奉仕に殉じることのできる者のみを送ること。(中西道子『タウンゼンド・ハリス』有隣新書、1993年 196頁)。

3. 宣教師の来日

1858年9月、長崎に滞在中のアメリカの3人の教職者、S・W・ウィリアムス(この時は米国艦隊付き中国語通訳。本来はアメリカン・ボード在中国宣教師で長老教会員)、H・ウッド(米国艦隊ポーハタン号付牧師でオランダ改革教会員)およびE・W・サイル(監督教会在中国宣教師)は、連署して来年の条約の実効に向けて、それぞれの所属する教会の海外伝道局に日本への宣教師派遣を促す勧告書を発信した。

S・W・ウィリアムスの提言は、以下のようのものであった。

余の思うには伝道の最も有望なる開始方法は、長崎又は江戸に一宣教師が居住して、日本青年に英語を教えることなり。…而して該宣教師の伴侶として一医師が加へられ、日本人を診療しつつ時に医薬の方法を教えるならば、而して兩人とも靈魂を深く愛して人を基督に導くことに熱心ならば必ず成功すべし。…宣教師に選ばるる人は忍耐、温和、倦まざる親切と、学問的傾向ある者たるべし。余はミッションが今後取らんとする経過と方法とを非常なる興味と同情とを以って見んと欲する者なり。(1858年9月30日付S・W・ウィリアムスからE・W・サイル宛て書簡。松平惟太郎『日

本聖公会百年史』1959年 10~11頁)。

列強との条約では、自国人の居留地内での信教の自由および宗教活動を認めていただけであったが、ハリスおよびS・W・ウィリアムスの提言は日本人への伝道を前提に人選しており、このことから彼らおよびアメリカ政府も、早晩、日本はキリスト教を解禁すると考えていたことが推測できる。初代来日宣教師は以下であるが、プロテスタント教会は中国伝道経験者や医師を優先し、日本人への伝道の即戦力を計画していたことがわかる。(米国監督教会は日本では米国聖公会と呼ぶ) *マークは医師

1858年11月5日 イワン・W・マアホフ ハリス
リストス正教会 箱館(領事館付)

1859年5月2日 J・リギンス 米国監督教会
長崎(病気療養)

1859年6月13日 ワシリイ・E・マアホフ
ハリス正教会 箱館(領事館付)

1859年6月29日 C・M・ウィリアムズ 米
国監督教会 長崎

1859年9月 ジラルール パリ外国宣教会
江戸(領事館付)

1859年10月17日 *ヘボン夫妻 米国長老教
会 神奈川

1859年11月1日 S・R・ブラウン 米国オ
ランダ改革教会 神奈川

同日 *D・B・シモンズ 米国オランダ改
革教会 神奈川

1859年11月7日 G・F・フルベッキ 米国
オランダ改革教会 長崎

1859年12月 M・カション パリ外国宣教会
箱館

1860年4月1日 J・ゴープル夫妻 米国バ
プテスト自由伝道協会 神奈川

1860年6月 J・L・ネビアス夫妻 米国長老
教会 神奈川

1860年9月 *H・E・シュミッド 米国監
督教会 長崎

4. 築地居留地の競貸開始と居住者の変化

江戸開市は1862年1月1日の約束であったが、国内情勢の緊迫により条約国に2度にわたり延期の申し出が行われた。政局は日々深刻度を深め政治問題や殺傷事件が多発した。その後も政情は混乱を続け遂に幕末を迎えることになり、江戸開市は明治新政府の手に持ちこされた。

1869年1月1日(明治元年11月19日)、新潟開港と同時に東京開市となった。居留地に選ばれた一帯は明暦の大火(1657年のいわゆる振袖火事)の焦土で造成された埋立地で、そのため「築地」と呼ばれた。江戸期は大名の上屋敷、中屋敷それに旗本の屋敷等が造成され、隣接して魚屋などの町屋が若干あった。東京開市以降、横浜の商人たちが東京進出を狙って支店を開設し、居留地の造成が進まない中、いち早く築地ホテル館や相対借地の日本家屋を借りて住み始めるようになった。ようやく明治3年に居留地の造成が完了し、明治3年6月3日(1870年7月1日)に第一回競貸が行われた。52区画中半数の26区画が落札されたが6区画は期日までに競貸金の納入が行われず棄権処理され、結局20区画のみの落札となり、下記以外の17区画を商人たちが占めた。

6番 宣教師(米国長老教会タムソン、カロザース)

7番 イギリス政府

17番2号 ユニオン・チャーチ(米国バプテスト教会ポート、オランダ改革教会フルベッキ)

築地居留地は52区画、26,162坪(のち60区画、29,073坪)、相対借地を含めても12万坪程度で横浜居留地の35万坪の3分1と狭く、地代も横浜に比べ割高、また海岸が浅く大型船が入港出来ないこと等から、商人たちはやがて支店を引き上げて横浜に戻って行った。

都市紀要4『築地居留地』の著者は、築地居留地が商業地として不振である理由を次の通り分析している。

「築地居留地が、他の居留地と異り、相当に費用をかけて設定したために、競貸金の元代金を相当高額にせざるを得ない事情もあり、これをせり落すことが容易でなかったことを示すもので、不振の原因の一と言えよう。その上居留地が東京で余りに南の隅に位していること、殊に鉄道が開通してからは、乗合船で横浜から来る人は少なくなり、皆汽車を利用するようになってしまった為、汐留の新橋駅からもやや離れて居り、市内の中心地へ出てゆくにも交通に便利という訳にはゆかなかった事等が居留地外居留外人の増大と相俟って居留地不振の状況を作ってしまったのである」。

5. 築地居留地とキリスト教

しかし、上述の状況から経済性を求める商人たちが漸次減って、明治17(1884)年の時点では52区画中、商人6区画、外国公館5区画(アメリカ

公使館、スウェーデン公使館)、宣教師館・教会・キリスト教学校32区画、空き地9区画となり、築地居留地はほとんど「キリスト教の街」となっていた。1区画の広さは31番のヘーレン屋敷2,800坪を除いて、概ね1区画400~500坪であった。これは横浜居留地の区割りを参考にしたと言われている。

キリスト教各宗、各派は、東京開市に伴い人口も多く政治の中心地である首都東京に新たな宣教拠点を置くようになってきた。明治17年までに、築地居留地に宣教拠点(ステーション)を設置したミッションを、時系列で見ると以下の通りとなる。ただし、落札名義人と住民は必ずしも一致しないので注意が必要である。(川崎房五郎『都史紀要四 築地居留地』東京都 1957年附表B)

明治3年6月3日 6番 米国長老教会 (タムソン、カロザース)

明治3年6月3日 17番2号 東京ユニオン・チャーチ (フルベッキ、ポート)・・・現在の塩瀬本店

明治7年6月10日 11番 米国メソジスト監督教会 (ジュリアス・ソーパー)

明治7年7月1日 10番 米国メソジスト監督教会 (ジュリアス・ソーパー、ドラ・スクンメーカー)

明治7年7月1日 35番 フランス・アポストリック・ミッション

明治7年7月1日 36番 フランス・アポストリック・ミッション

明治8年1月1日 46番 サン・モール修道会 (ラクロ・マチルド)

明治8年12月15日 7番 米国長老教会 (ヘボン)

明治8年12月30日 18番 スコットランド一致長老教会 (フォールズ、マクラレン)

明治9年7月20日 42番 米国長老教会 (タムソン、インブリー)

明治9年8月1日 20番 スコットランド一致長老教会 (フォールズ、デビットソン、ワデル、マクラレン)

明治10年1月 4番 カナダメソジスト教会 (カックラン、イビー)

明治10年11月 51番 英国教会伝道協会 (パイパー、ワーレン)

明治10年11月 52番 英国教会伝道協会 (パイ

パー、ワーレン)
明治10年12月 5番 カナダメソジスト教会
(カックラン、ミッチャム、イビー)
明治10年12月6日 19番1号 米国オランダ改革
教会 (アメルマン)
明治11年7月1日 48番 英国福音伝播協会
(ライト)
明治11年7月1日 49番2号 英国福音伝播教会
(ライト)
明治12年2月7日 17番1号 米国長老教会・米
国オランダ改革教会、スコットランド一致長老
教会合同
明治13年2月1日 26番 米国聖公会 (C・M・
ウィリアムズ)
明治13年2月1日 37番 米国聖公会 (C・M・
ウィリアムズ、ガーディナー)
明治13年2月1日 38番 米国聖公会 (C・M・
ウィリアムズ)
明治13年2月1日 12番 米国メソジスト監督教
会 (ソーパー)
明治13年2月1日 15番 米国メソジスト監督教
会 (ハリス)
明治13年2月1日 16番 米国長老教会 (イン
ブリー)
明治13年2月1日 30番 米国バプテスト教会
(H・H・リース)
明治13年4月 28番 合衆国ドイツ改革教会
(グリーンゲ)
明治14年4月 27番 米国長老教会 (J・C・
バラ)
明治14年6月 13番 米国メソジスト監督教会
(ハリス)
明治14年7月 23番1号 米国長老教会 (タム
ソン)
明治15年2月1日 25番 米国聖公会 (C・M・
ウィリアムズ)
明治15年2月1日 39番 米国監督教会 (C・M・
ウィリアムズ、ガーディナー)
明治15年2月1日 40番 米国監督教会 (C・M・
ウィリアムズ)
明治15年2月1日 29番 米国オランダ改革教会
(E. ローゼミラー・個人住宅)のち益田孝邸
明治15年2月1日 43番 米国長老教会 (J・C・
バラ)
明治15年2月1日 45番 サン・モール修道会

(ラクロ・マチルド)
明治17年2月25日 8番 米国オランダ改革教会
(ワイコフ、ミラー、アメルマン)
明治17年2月25日 44番 米国福音教会 (ク
レッカー、ハッツレー、フェーゲライン、ホルツ)
明治17年2月25日 50番 米国福音教会 (ハッ
ツレー、フェーゲライン、ホルツ)
明治18年8月21日 49番 米国福音教会 (ハッ
ツレー、フェーゲライン、ホルツ)
明治38年 14番 デュサイプル教会

6. 改正条約実施と居留地の廃止

明治政府は最大の外交課題である条約改正を推
進するため、井上馨外務卿・外相によって欧化政
策が進められたが、この鹿鳴館時代と呼ばれた明
治10年代後半は、プロテスタント・キリスト教が
大いに伸長した。しかし、条約改正交渉が失敗に
終わる20年代に入ると、従来の欧化主義への反動
によって国家主義が急速に台頭してきた。やがて、
大日本帝国憲法の発布、教育勅語の公布を通じて、
政府によるキリスト教の抑え込みが強くなり、内
村鑑三不敬事件なども起こり、やがてプロテスタ
ント・キリスト教および関係キリスト教学校は急
速に極度の不振へと向かって行くことになった。

明治政府は1894(明治27)年7月16日に日英通
商航海条約を結び、領事裁判権を廃し遂に条約改
正を実現した(関税自主権は未回復)。そして5年
後の1899(明治32)年7月4日、全国の居留地が
廃止となり、内地雑居が始まった。

その間、築地居留地のキリスト教学校にも変化
が生じ、明治20年前後に東京一致神学校・東京一
致英和学校、新栄女学校、海岸女学校の有力校が
広い校地を求めて、日本人の名義で土地を確保し
て築地居留地を離れ居留地外に出ていった。プロ
テスタント系では一人、立教中学校と立教女学校
が居留地廃止後も残り、1923(大正12)年の関東
大震災まで築地居留地で教育を続けた。立教は居
留地内に広い土地を確保し充実した教育施設、特
に多くの生徒を収容できる寄宿舎を設置し、加え
て隣接して宗教教育のできる教会もあったことか
ら、全体としては狭隘でやや不便な場所とされた
築地居留地であったが、これらの条件を備えたこ
とで、関東大震災の日まで旧居留地で高い水準の
教育を継続し得た。

7. 関東大震災による旧居留地全壊

大正12(1923)年9月1日11時58分32秒(日本時

間)に関東大震災が発生し、居留地廃止以後かえって賑やかであった旧築地居留地は全壊し地上から消失した。



『青山学院緑岡初等学校の学童集団疎開』の出版

中村 早苗

はじめに

戦後70年を迎えた2015年の青山学院創立記念日に『青山学院緑岡初等学校の学童集団疎開』が青山学院初等部から刊行された。出版のきっかけは、2003年、筆者の青山学院大学での修士論文作成時に行った青山学院緑岡小学校（現在の青山学院初等部の前身、昭和16年に青山学院緑岡初等学校と改称、以下、緑岡初等学校とする）に関する資料調査に対して、4期生の大島照雄氏から疎開当時の日記のコピーを提供されたことに始まる。2014年春によりやく本書と同名の論文として発表したのが、論文にとどまらず、戦争を知らない子どもたちに学童集団疎開を伝える本を作りたいという希望があった。そこで、2014年の秋、緑岡初等学校の疎開経験者の方々と編集委員会を立ち上げ、準備した原稿や資料をもとに交渉をしたところ、戦後70年の夏を前に青山学院からの出版が決まったのであった。

2015年の夏、正確な内容を検証するために最初の疎開先である伊豆・湯ヶ島と再疎開地である青森県弘前市・旧船沢村へ疎開児童の足跡を訪ねた。大島照雄少年の疎開当時の日記については本書を読んでいただくことにして、本発表では緑岡初等学校の学童集団疎開の概要と実際に疎開地を訪ねてあきらかになったことについて説明をしたい。

青山学院緑岡小学校の創立と米山梅吉

(1) 青山学院と米山梅吉

1868（慶應4）年に江戸に生まれた和田梅吉は5歳で父を亡くし、静岡県三島の母の実家で育つ。神童の誉れ高かった梅吉は、素封家である米山家の養子に望まれて沼津兵学校の後身である沼津中学で学ぶ。沼津中学で学ぶうちに東京へ出てもっと勉強がしたいと、1883（明治16）年12月無断で家を出た。東京では大学予備門に憧れたが学資がない。アメリカへ行けば、スクール・ボーイをしながら大学に通えると、渡航費を貯めるために東京府の吏員に就職した。その後、青山の東京英和

学校（青山学院の前身）に入学したが昼間の学校に通うゆとりはなく、英会話の習得が目的であったので東京英和学校の銀座分校とでもいべき福音会英語学校（夜学）に入学した。米山が青山学院で教育を受けたのはこの短期間とされている。1887（明治20）年に渡米、滞米8年、その間にサンフランシスコの福音会で本多庸一との出会いがあり、この出会いによって米山は校友会長、理事として青山学院の発展に尽くすことになったと考えられる。

米山は帰国後、米山家の一人娘はると結婚した。1897（明治30）年に三井銀行に入社し、持ち前の能力と人望もありエリートコースを歩んでいった。米山は様々な社会奉仕を実践したが、主なものとしては日本ロータリークラブの創立、三井報恩会での働き、そして青山学院への奉仕の三つが挙げられる。

米山は1915（大正4）年に青山南町六丁目に新邸を築いたが学院に出入りはしていなかった。たまたま親交のある民友社の山路愛山の紹介によって第三代日本人院長の高木壬太郎に会った。高木は米山と同県人であり、学院の財政を健全にしたいという高木の熱意は米山を動かした。米山は、間島弟彦、黒川新次郎両氏と共に校友会選出の理事に任命され、この後、校友会長として学院への協力にますます力を注ぐことになる。

(2) 緑岡小学校の開校

第六代院長阿部義宗は、1933（昭和8）年の院長就任演説において小学校と幼稚園とを設立すべきことを方針の一つとして述べた。その後、ある会合で同席した米山と小学校建設の話題になり、米山から「自分の力で小学校を建設しよう」との申し出があり、その二日後には青山女学院の卒業生である米山の妻はるから自分が幼稚園を建設して寄附しようという申し出がなされた。

しかし、小学校を宗教学校である青山学院が経営することは当局の許可を得ることが困難であったので、青山学院とは別の青山学院小学財団を設立し、校名は青山学院緑岡小学校として1937（昭和12）年4月に開校した。米山の教育の理想は「第一に青山学院のもつ宗教教育、第二に英語を教え、平和を愛する国際的人物を作ること」また、緑岡小学校の校訓は、「人からされて嬉しかった事は、人にもそのようにしなさい。人からされていやであった事は、人にもしてはいけなさい。」であった。

米山が朝礼で児童に繰り返し説いたこの校訓は、戦争へ向かう暗い時代にあって、子どもたちの心の奥深くに響き、幼い時に覚えたこの言葉が人生の指針となったと多くの卒業生が述懐している。

このように、米山の理想によって始められた緑岡小学校であったが、時代はその理想の実現を阻み、全く別の方向へと進んでいった。

緑岡初等学校の学童集団疎開

緑岡初等学校が渋谷区に指定された疎開地は静岡県であり、再疎開地は青森県であった。偶然であるが静岡は米山梅吉の郷里であり、青森は日本人の初代院長である本多庸一、その甥の阿部義宗、第七代院長笹森順造など、青山学院の牧師・教員を多数輩出したゆかりのある土地である。そのような関係から、校長である米山が児童の疎開生活のために力を尽くした事実を本書ではあきらかにすることができた。

(1) 伊豆・湯ヶ島の落合楼での疎開生活

緑岡初等学校は1944(昭和19)年8月23日に伊豆・湯ヶ島の落合楼へ向けて出発した。

修善寺から湯ヶ島へ向かう途中に現在も「嵯峨沢館」がある。疎開学園の責任者であった小宮山伍助が後年語ったことによると、緑岡初等学校が渋谷区から最初に疎開先に指定されたのはその嵯峨沢館だった。しかし、当時の落合楼当主足立重氏は青山学院の卒業生で青山学院の教員、その子ども三人は緑岡初等学校に在学していたことから、米山が直接電話で静岡県知事に依頼して疎開先変更が許可され落合楼へお世話になったのだった。

現在、落合楼は新しい経営者に引き継がれ「落合楼村上」として営業している。宿泊者には国指定登録有形文化財である館内のガイドツアーがある。疎開当時の写真そのままの建物が保存され、大切に使われていることにタイムスリップしたような感動を覚えた。

湯ヶ島での疎開児童の生活では「行軍」と称して頻繁に近隣の自然の中へ出かけていた。魚釣り、わらび採り、農作のための開墾など食料調達のための目的もあった。疎開児童の行軍先である与市坂、天城トンネル、不動の滝、浄蓮の滝、鉢窪山、八丁池を訪ねてみると、車での移動ではあつという間だが落合楼から小学生が歩くのには大変な距離である。計画、引率した先生方の苦労だけでなく、行軍には地元の方々の協力もあったと思われる。

(2) 弘前女学校と船沢村での疎開生活

東京近県も危険になり、緑岡初等学校の児童約70名は昭和20年6月10日に湯ヶ島を出発、途中、品川駅での家族との面会があり、6月12日に弘前駅に到着した。準備が整うまで旅館に宿泊、6月24日に弘前女学校(現・弘前学院)の高谷記念館に落ち着いた。しかし、青森市が空襲を受け、第八師団所在地である弘前市も危険となり、7月16日、中津軽郡船沢村(現在は弘前市に編入)に移り、船沢国民学校の和室に滞在後、地主の屋敷4軒に分宿した。そして終戦を迎え、東京に戻ったのは10月20日のことだった。

弘前が青山学院と深いつながりがあることは前述した。米山が弘前で疎開児童への対応を笹森に依頼する書簡が残されており、笹森はじめ、笹森の兄で東奥義塾塾長であった浅田良逸、弘前教会の櫻庭駒五郎も疎開児童のために奔走した。しかし、船沢村での分宿の経緯はこれまで不明だった。今回の調査では船沢村での分宿の経緯と4軒の屋敷を確認することが大きな目的であった。

弘前での調査には笹森家の協力があつた。弘前学院の外国人宣教師館で弘前女学校の卒業生へのインタビュー、その後、坂本町の校舎跡地、児童が滞在した小堀旅館(現在も営業)、石川旅館の跡地、行軍先の五重の塔がある最勝院を訪ねた。最勝院には青山学院の教授であった山田寅之助の妹で高谷記念館を寄附した高谷とく・貞次郎夫妻と長女・初恵子の墓がある。夫妻は熱心なクリスチャンであり、初恵子は弘前女学校に学び、青山女学院専門部に進学したが病のため18歳で亡くなった。仏教の寺院にある墓にもかかわらず、三名連名の墓石の側面には聖句が刻まれ、この墓地には宣教師の墓、カソリック教徒の墓の区画もある。市内に点在する教会や洋館も含めて、明治の早い時期にキリスト教が根づいた弘前の文化を感じる光景だった。

船沢村での分宿先4軒を探し当てるために、弘前市立図書館に資料を依頼しておいたところ『青森県人名大事典』に当主3名が掲載され、住所の地名と番地は現在も同じこともわかり、現在も船沢に住む3軒の子孫を訪ねることができた。残る1軒も船沢の方々の協力によって弘前市街に住む子孫の連絡先が判明、4軒に完成した本書を送ることができた。分宿先の4軒の当主について調べるうち、当主の一人・高谷英城は弘前女学校に高

谷記念館を寄附した高谷夫妻の甥であることがわかり、また、高谷英城、笹森順造、阿部義宗は弘前中学校で同級生だったことが判明した。これらのことから、弘前女学校と青山学院との深いつながりがある疎開児童が船沢村の地主の屋敷四軒に分宿できたのだと確信した。

終戦後の9月に疎開児童が行軍した高照神社、岩木山神社、嶽温泉、そして4年生以上の男子が登山した岩木山へも行ってみた。ここでも小学生が麓の船沢村から岩木山頂上まで登ることは大変なことであったと実感した。

おわりに

疎開先を訪ねてみると資料だけではわからない発見がたくさんあり、疎開児童は、引率の教員だけでなく、疎開先の方々に守られながら豊かな自然の中で精一杯生活していたのだと感じることができた。

本書の出版に際して希望していたことが二つあった。疎開児童と同じ年齢の子どもたちが読める本を作りたいということ、そして、なるべく多くの一次資料を掲載したいということだった。幸い、本書の編集を進めていく中で編集委員を通して大切に保管されていた書簡、学校からのお知らせ、写真等が資料センターに寄贈され、本書に収録できた。

子どもたちが読める本にしたいと願いながら、小学生には少し難しい本になってしまったが、本書は学童集団疎開を経験した方々から現代の子どもたちへの「もう絶対に戦争をしてはいけない」というメッセージであるので、長く読み継いで欲しいと祈っている。

新渡戸稲造と松本重治

太田 愛人

松本は『国際日本の将来を考えて』の中で「最後に恩師新渡戸稲造先生が、私に一对一で教えてくれた二つの言葉を、次代になう人たちに伝えておきたい。先生はインタナショナルな視野をもったナショナリストであり、またナショナルなことを身につけたインタナショナリストだった」と書いている。これを具体的に実行したのが松本であり、松本の聴き書きを朝日新聞の松山記者が伝えた。今や初代からかぞえて三代目の時代である。

松本は神戸一中、一高、東大法学部に進み、在学中、内村鑑三の集会に出席した。ここまでは矢内原忠雄の経歴と同じである。一中の校長は矢内原時代と同じ内村、新渡戸と札幌で同期の鶴崎久米一であった。矢内原は上京して接した内村から神を学び、新渡戸から人間を学んだ、と書いている。矢内原の一高卒業の年に新渡戸は退任している。内村の弟子の一人に岩永裕吉もいた。医学界の先駆者長与専斎の四男、作家長与善郎の兄で後年、同盟通信社の初代社長に就任。松本は岩永に見出されて官僚や学者の途を断ってジャーナリズムを選択した。最初は高木八尺の導きで東大に残ったが、記者に転身する。高木はドイツ、イギリス系が重きをなす東大にアメリカ学を据えた法学部教授で、新渡戸の後継者と目されていた。新渡戸はある日「松本君、センス・オブ・プロポーションという言葉を知っているかい」「これは大きいことと小さいことを識別する能力をいう。イギリス人はこの能力に強いが、日本人はまだ弱い」あるときは「グラスプ・オブ・シングスという言葉を知っているかね」と訊かれても知らない。「人生でも、社会や政治の問題でも複雑に決まっている。そうした問題の核心を把握することをいったんだ。そうすれば自ずとどうすればよいか、分かってくる。これも、イギリス人というか、アングロサクソンが強いんだな」と教えた。

大学で教えられないことをジャーナリスト松本は新渡戸から学ぶことが多かった。最後の警告は「松本君、日本村で有名になろうとするなよ」で、松本は国際ジャーナリストになるために官ではなく民を重んじて生きた。それだけに新渡戸は松本に賭けていたのである。新しい途を開拓するために松本には新渡戸や内村の弟子岩永、高木の存在が大きかった。松本が初めて新渡戸の仕事に参加するのは太平洋会議であり、そこで太平洋架橋に参加して「ピース・メーカー」を実体験する。

盛岡中学で宮沢賢治の二年先輩であった鈴木彦次郎（前号参照）と佐藤得二が松本と同期に一高に入学した。鈴木は作家になり、哲学科で学んだ佐藤は一高教授になったが、戦後、直木賞を受けて異色の作家になる。戦時中『佛教の日本的展開』を出版し、戦後は国際文化会館参与になり松本に協力した。同僚三谷隆正が、前田多門の次女美恵子が渡米するとき、佐藤の本を餞に贈った。渡米した美恵子は医学を志向して帰国するや女子医専

に入学。学生時代に宮沢賢治を愛読し、三谷が死ぬまで師事した。松本が国際文化会館理事長に決まるや、美恵子の兄前田陽一が専務に就任した。前田はパリ留学中に戦争が始まり大使館員に採用され、高田博厚の自伝『分水嶺』にも登場する。

関東大震災後の12月、松本は渡米シイエール大学で学び、そこで新渡戸の三狂と仇名された一人鶴見祐輔に会う。(他の二人は前田多門、田島道治)。鶴見からチャールズ・A・ビードを紹介され、コロンビア大学を辞し在野の学究となったビードから多くを学ぶことになる。日本でビードの名は関東大震災の一年後に鶴見の岳父で東京市長の後藤新平に招かれて来日し、東京復興に協力して後藤を助けた人として知られる。前田多門も震災前に三年間、市の助役であった。

帰国した松本は高木教授の米国講座の助手として勤めた。米国講座とはアメリカ銀行家で宣教師へボン一族の一人が日米交流のため基金を東大に贈り講座を開設した。それに国粹派の教授たちが反対したが、会津出身の山川総長と長岡出身の小野塚法学部長の英断で採用され、後年、大きな働きをする。開設当初は新渡戸、吉野作造、高木八尺、美濃部達吉らが講座を担当した。

新渡戸の意図した「太平洋の橋」架橋は日米の国際派により徐々に進められていった。1925年、松本の生涯で決定的なことが実現される。それは太平洋問題調査会の第三回会議が京都で開催されたことである。事の始まりはアメリカのYMCAが、日米間の平和、交流を意図した運動で、日本では日本YMCA 総主事斎藤惣一が加わって第一回会議が1926年にハワイで開かれた。この時は各国のYMCAに呼びかけたが、第三回から宗教色を薄めて発展し、京都で開かれることになった。新渡戸を団長として岩永、高木、鶴見が加わり松本は書記として参加した。ここに松方も同盟通信社員として加わり、前田の子陽一、斎藤勇の子真、斎藤惣一の子勇一も手伝った。

そこに場違いな参加者松岡洋右が出席して中国代表の徐淑希と論争して平和より対決を印象付けるような感じを出席者に与えた。松岡は後年、ジュネーブの国際連盟にも日本代表として出席し、連盟脱退のきっかけの演説をして42対1の評決をもたらした。日本の国際化の方向を破ることになる。新渡戸の流暢な英語に比べて長州人松岡の英語は劣っていた。やがて新渡戸の平和工作は、松岡の

国際連盟の演説で破られた。日独伊三国同盟へ向かい、「軍閥が国を滅ぼす」途を開くことになる。

第三回会議の最終日に新渡戸は「他人の祖国を憎むことなく、己が祖国を愛することも出来、他人の利益を害うことなくとも外国人と貿易することは可能であります。即ち他人の力を卑劣なる手段で害うことなく同じ競争することができます」と結んだ。会場は拍手で満たされ、中国代表も拍手した。

外務省は国際会議に不馴れで積極的な援助をしなかったが、三菱、三井、住友、満鉄が一万円ずつ出したのでまかなえた。マスコミでは朝日の前田、毎日の高石真五郎、新聞連合では岩永裕吉という大物が出席した。満州問題が議題にあるため政府は消極的だった。前田陽一と斎藤真は戦後に東大教授になる。

第四回が上海で開かれたのは1931年で、松本は日本代表の一人に格上げされた。これがおわると、新しくアメリカで日本移民排斥問題がおこり国際関係が一層困難になり、新渡戸の立場を揺るがせる情勢に変化していく。

太平洋会議は不幸な終わりを告げ、やがて太平洋戦争が勃発する。新渡戸の死の年1933年の前年、松本は岩本に入社早々、上海支局長に任命され、文字通り国際ジャーナリストになるが、バンクーバーには欠席し、新渡戸の最後を看取れなかった。泥沼化した日中戦争中は上海支局で戦争阻止の構想を練った。かなり上層部まで食い込んだが、病気のため鎌倉で静養生活に追いやられた。

戦後公職追放になったが、時には霊南坂の松方三郎宅に奇遇したことから、近くの吉田茂との交流が出来、吉田のブレーンのような仕事もした。偶然、吉田の側近白洲次郎が松本の神戸一中の後輩であった。松岡外相時代にはアメリカ大使に要請されたが断った。戦後も在野の立場を貫いたが、国際文化館設立のため税制その他のために池田隼人、宮澤喜一の力を借りたことがあった。国際文化会館建設は太平洋の架橋の完成とも見られる。ここでも同盟時代の仲間で同業となる松方三郎とのコンビが地力を発揮した。さらに国際の命名が展開するにふさわしいアメリカ人が加わる。既知のロックフェラー三世である。

1953年、国務長官ダレスは日米交渉のために三世を同行させた。「その年の2月、ロックフェラーが来ると、さっそく戦前の1925年、太平洋会議の

ときに知り合った私とが高木先生とか松方に会いたいといってきたのです。ロックフェラーは文化交流についての構想を述べたうえ、そのためにどうしたらいいか、をたずねました。私は即座に、それなら、超一流の思想家、学者を早くアメリカから日本によこしなさい。そうすれば日本のインテリ層の間にあるアメリカに対するイメージが変わるだろうと、提案したのです。ロックフェラーは膝を乗り出して真剣に聞いていました」と書く。国際文化会館が発足することになり、新渡戸が戦前に播いた種が一九五五年初夏、開花した。野村胡堂を岳父に持つ松田智雄は会員証8番だと語っていた。

ダレスは再軍備構想を拒否されて帰国したがロックフェラーは国際文化会館に協力し、グロビウス、トインビー、ティリヒ、リースマン、ケナン、ルーズベルト夫人らが来日して日米交流を広めていった。ここに思い出すのは、ジュネーブ国際連盟時代の新渡戸の周辺にパデレフスキー、キュリー、マレー、ベルクソン、アインシュタインが居たことで、大戦のあと平和の交流がジュネーブで展開され、日本も国際的な地歩を占めることになった。

松本の国際ジャーナリストとしての名実ともに高めたのは1933年、共同通信社上海支局長に抜擢され、文字通り国際ジャーナリストとして日支戦争の渦中を生きた頃であった。中でも38年重慶政府を動かし、近衛首相を説いて徴兵を条件に和平運動を工作したことである。またいわゆる西安事件における蒋介石、周恩来、毛沢東の名が飛び交う有名なスクープは、国際ジャーナリストの名を高めて外国でも名前を知られるようになった。

松本の主著と言うべき本に『上海時代』がある。松本の働きが戦後、中央公論親書上・中・下三巻に余す所なく記され、1955年、第22回日本エッセイスト・クラブ特別賞を与えられた。南京事件も含めて日本軍の中国への加害は松本らの働きで知られるようになる。一九三七年、上海に学生を引率してきたプリンストン大学教授ロバート・ライシャワーが、日本軍飛行機誤爆事件で爆死した。兄は少年時代から弟より人気があったらしい。

六年間の同盟支局長の間、魯迅と交流を深め、日本人内山完造との交流により内外人との知己が増え、国際人としての幅も広げた。昭和一四年、編集局長として同盟本社に帰り、日米戦争回避のため近

衛とルーズベルトとの首脳会議を策した。新渡戸の念願であった「太平洋の橋」の架橋のため太平洋問題調査会発足当時から長い間、日・中・米の融和画策に加わった。国際文化会館は今日まで太平洋の橋の役目を果たし、その役割を拡げている。



米国長老教会女性宣教師メアリー・E・リード と慈恵の初期看護教育

芳賀佐和子

はじめに

日本の看護教育の嚆矢は、明治18(1885)年に芝区愛宕町に開設された有志共立東京病院看護婦教育所である。創始者高木兼寛は教育所の看護指導者を探し、在日中であった米国長老教会女性宣教師Mary E.Reade(メアリー・E・リード)を招聘し、「看護婦」という新しい職業を实践するにふさわしい人材を育成する仕事を委ねた。

有志共立東京病院看護婦教育所の流れを汲む、慈悲の看護教育は平成27年に130年を迎えたが同年、長年探していたリードの墓所が発見された。

今回は、リード家の墓地と家族に関する新史料を中心に、Mary E.Readeの出自と慈恵の初期看護教育について述べる。

1. リード家の墓地とフルネーム

リードの墓所はNew London County, Connecticut, USAのJewett City Cemetery, Plot: Lot 52にある。墓地の記録によると、リードの氏名はMary E Butler Reade、1860年にニューヨークで生まれ、1902年5月8日にNew London County, Connecticut, USAで死亡した。Hezekiah Lord ReadeとFaith B Partridge Reade夫妻の養女で、独身であった。養父のリード氏は当時、コネティカット州東部の最も著名で有力な人物の一人として数えられ、製造業、金融、文学的事業において秀でまた教会および伝道に生涯にわたって奉仕を続けた。従来、リードの正式名については、Mary E.Readeであろうと推測されていたが、文献によってMiss ReedやMiss Mary L. Reede或いはMiss M. E. Readと幾通りにも綴られ、特定出来ずにいた。今回の墓所発見により、リードのフルネームは、Mary Ella Butler Readeが正しいことが判明した。

2. ヘボン博士と高木兼寛の交流

高木は、明治8年から5年間、英国のセント・

トーマス病院医学校で学んだ。明治13年に帰国すると留学での体験をもとに、「医風を改良し学術を講究する」ことを目的に成医会をつくり、成医会講習所を開設し医学教育を開始した。さらに明治15年には講習所を発展させ、有志共立東京病院を開設した。成医会では明治16年に、成医会文庫が設立され、文庫設立委員7名のなかにヘボン、エルドリッジ、ホイットニーのアメリカ人医師3名が選出され、さらに翌17年10月1日に、外国人医師8名の成医会入会申し込みがあった。当日は親睦会が築地の精養軒で開かれ、ヘボン博士が祝辞を述べている。同年10月8日の例会では、高木会長がヘボンとホイットニーを名誉会員に推薦し、会員の賛同を得ている。

3. 高木兼寛の看護教育とMary E. Readeの招聘

英国のセント・トーマス病院医学校に留学した高木は、在学中、病院内にあるナイチンゲール看護婦訓練学校(1860年にF.ナイチンゲールが創立)の卒業生が臨床で働く姿を見て、看護婦の重要性を肌で感じて帰国した。

高木は婦人慈善会などの協力を得て看護教育を開始することを決意し、リードが慈恵の看護教育に関与することになった。リードを慈恵に招聘した経緯については、ヘボン博士と高木との交流や婦人慈善会会員大山捨松の協力などが考えられる。

慈恵に現存するリードの史料には「明治17年10月17日米国婦人リード氏看護法教授ノ為来院ス爾後毎週金土の両曜日ヲ以テ教授の定日トス」(『東京慈恵医院第1報告』)という記述や、看護婦帽子などを寄付した記録がある。また、同窓会誌『恵和会報』に「(前略)リード女史は米国でナイチンゲール看護婦教育を受けられた方でありますから(後略)」などリードについての記載が見られる。

4. Mary E. Readeの来日から帰国まで

リードの来日は、米国長老教会ニューヨーク婦人伝道局宣教師として、米国長老教会在日宣教師団に派遣されたことによる。その目的は、新栄女学校のK.M.ヤングマンが英語と音楽を教える女性を要望したことに端を発している。リードは、明治14年10月29日に男性宣教師J.B.ポーターとともに横浜港に到着した。来日後は、築地の新栄女学校で仕事につき、明治16年に、米国長老教会フィラデルフィア婦人伝道局が運営する番町の櫻井女学校に移り、校長格のM.T.ツルーが帰米している間、代理のA.K.デビスを補佐していた。

明治17(1884)年9月24日に、高木の要請で米国長老教会在日ミッションの在京浜宣教師によって会議が開かれ、J.C.ヘボン、D.タムソン、J.C.バラ、リードら16名の男女宣教師が出席して、次のことが決められた。「芝の病院と関係を持ちたいというリード嬢の申し出により、その件について高木博士と話し合いを持つための委員が指名された。」その後、同17年10月3日の常任委員会で、リードが芝の病院で仕事をする件について承認され、10月17日の看護法指導の為の来院となった。翌18年1月6日にヘボン、ブライアン、T.M.マクネア、リードら13名の宣教師が出席しミッション会議が開催され、リードの仕事が高く評価された。そして、明治18年1月7日にリードと教育所所長の高木との間で次の雇用契約が交わされ、リードの活動が本格化していった。

1. リード氏ハ二カ年間無給ニテ有志共立東京病院ニ勤務スベシソノ職務ハ病院ノ規則ニ制定スル者ニ従フ但シ服務時間ハ一日四時間ヲ超過セザルベシ
2. リード氏ハ院内何ノ部ニ立入ルモ妨ゲナカルベシ
3. 下裨二名室ニツ生活用諸雑貨を供ス
4. リード氏ハ他ノ職務ニ差シ支エアラザル時ハ耶蘇宗ニ関スル事ヲ教訓スル事ヲ許ス

そして、明治20(1887)年2月、慈恵との契約が終了したリードは、新栄女学校に戻り音楽を教えていた。その後、明治21年に在日ミッションに辞任届けを提出し、5月19日、日本を立ち7月に帰国した。リードの日本での活動は、明治14年から明治21年の7年間であった。

明治21年9月17日に築地新栄教会の長老と牧師連名でリードの布教活動の有用性について、米国長老教会海外伝道局に書簡が送られた。

5. Mary E. Readeと慈恵の初期看護教育

有志共立東京病院看護婦教育所の教育目的は、病院内はもとより派出看護に応じる事ができる看護婦の養成であった。教育のシステムは、試験の上見習生を採用し、病室での見習を経て適性を認められた者が試験を受け生徒に採用され、その後2年間勉強をするというものであった。1回生は明治18(1885)年10月から見習生13名を採用、生徒に採用された者は5名であった。修得科目は学説と実際であった。看護のテキストは、高木兼寛が英国から持ち帰った『ハンドブック・オブ・ナーシング』を訳して『東京慈恵医院看護学』と題して使われた。この本は、コネチカット看護学校で使

われていたものである。生徒は寄宿舎で生活し、公私ともに看護婦としての訓練を受けた。

リードは看護法を教授するのみならず、看護婦帽子や前掛などを寄付し、看護婦という新しい職業の服装を整え、看護のあり方を示した。

教育所看護婦生徒の1回生5名は、リードとさほど年の差のない21歳～26歳であった。1回生は明治21年2月1日に卒業した。卒業生の鈴木キクは、後に第3代看護婦取締になり、明治24年から10年間、教育所の牽引役を勤めた。教育所の基礎固めを行う時期にリードから直接教えを受けた鈴木キクの存在は大きい。そして、鈴木キクを育てたリードの功績は何ものにも代え難い。

高木はリードにキリスト教の布教を許可した。教育所では、看護婦取締や生徒の中でキリスト教を信仰する者が多かった。2代看護婦取締の松浦里や3代看護婦取締の鈴木キクはクリスチャンであった。鈴木キクは、J.H.バラから受洗し、松浦里や生徒の拝志ヨシネ等は、新栄教会の石原保太郎牧師から受洗している。キリスト教が看護婦という新しい職業を目指す女性達とリードとの間を繋ぐ精神的な拠り所になったのではないかと考える。

6. Mary E. Readeの死

リードは明治35年5月8日に死亡した。墓石には「M. E. READE A FOSTER CHILD OF H. L. & F. B. P. READE KILLED BY FIRE FROM MT. PELEE IN HARBOR OF ST. PIERRE ISLAND OF MARTINIQUE MAY 8 1902 A MISSIONALY IN JAPAN SEVEN YEARS」と刻まれている。リードはこの時42歳であった。体調を崩し、マルチニーク島の近くを船で旅行中、プレー島の噴火により、大やけどを被い、数時間後に亡くなった。

おわりに

有志共立東京病院看護婦教育所の最初の看護指導者リードは、42歳の生涯であった。そして、21歳から7年間を日本で過ごし、宣教師、女学校教師、看護指導者として精一杯の日々を過ごしたと思われる。リードの墓石は、養父によって建てられたものであろう。墓石に刻まれた「A MISSIONALY IN JAPAN SEVEN YEARS」の文字が印象的である。養父は1903年に、養母は1904年に相次いで亡くなっている。

慈恵看護教育130年の年に、今まで探し続けて

きたリードの墓地が発見された。今後、リードが看護教育を受けた学校や、帰国後どのような生活を送っていたかについては継続して調査していきたい。

【研究発表リスト（その40）】

- 第378回 2016.3.19 鈴木 進
「聖書改訂 (Matai Den Fukui-In Shoから『馬太傳福音書』へ) と和英語林集成』の活用」
- 第379回 2016.4.16 中島 耕二
「旧築地外国人居留地散策」
- 第380回 2016.5.21 中村 早苗
「青山学院緑岡初等学校の集団疎開」
- 第381回 2016.6.18 太田 愛人
「新渡戸稲造の世界と国際ジャーナリストの系譜」
- 第382回 2016.7.16 芳賀 佐和子
「米国長老教会女性宣教師メアリ・E・リードと慈恵の初期看護教育」
- 第383回 2016.9.17 原 真由美
「太平洋戦争中におけるFMCNA (北米外国伝道協議会) の日本研究」
- 第384回 2016.10.15 坂井 悠佳
「創立期の同志社英学校における教育活動」
- 第385回 2016.11.19 原島 正
「国家と宗教—思想的考察」

【編集後記】

現在、横浜プロテスタント史研究会では、103名の方々に案内を出しています。当研究会では、発足当初の目的を横浜開港に伴う宣教師の研究ということで研究会を中心として活動をしてきました。その後、研究領域が広がって、日本全般にわたるキリスト教史の研究、また他の国々におけるキリスト教の研究というように研究対象が広がってきています。

毎回25名前後の方が出席くださっています。研究会のメンバーを見ますと、テーマを決めて研究している方、キリスト教史に関心を持ち、教養講座的な考え方で出席される方も多くみられ、毎回楽しみにしているという声を聴きます。どうぞ、これからも暇を見つけて例会に出席し、研究会を盛り立ててくださいますようお願い致します。

(岡部一興記)